

「弱まる」と「弱める」の意味分析

——認知言語学の観点から——

李 澤 熊

1. はじめに

本稿の目的は、形容詞派生動詞と呼ばれる「弱まる」と「弱める」を取り上げ、形容詞「弱い」との関連性を指摘しながら、2語が持つ複数の意味を記述し、それらの複数の意味の多義構造（関連性）を明示することである。

先行研究は辞典・辞書類を除けば、管見の限り見当たらない。辞書類の記述によると、「弱まる」はいずれも単義語として扱われているが、下に示す例(1)、(2)における「弱まる」は、明らかに異なる意味の側面を表していると考えられる。

「弱まる」

『日本国語大辞典』第2版：力や程度が次第に弱くなる。だんだん勢いが衰える。

『大辞泉』第2版：力や勢い、程度などが次第に弱くなる。

(1) 火力・放射能が弱まる。：【物質に関する現象】物理的な力

(2) 絆が弱まる。：【人間関係】抽象的な力

以上の例は、確かに「何らかの力や程度、勢いが弱くなる」というようにとらえられ、基本的に辞書の記述で問題ないように思われる。しかし、上記の事例を一つの意味にまとめてしまうと、例(1)の「物質（具体物）に関する物理的な力」と例(2)の「人間関係に関する抽象的な力」といった特徴（違い）が隠れてしまう。詳細は後述するが、「放射能と人間関係が弱まる」という文が日本語母語話者にとって不自然な表現として認識されることから分かるように、多義性を認めたほうがより適切な記述ができるのではないかと考えられる¹⁾。

一方、「弱める」については、『明鏡国語辞典』にのみ多義語として扱われているが、「台風の勢力」（物理的な力）と「結束力」（抽象的な力）を同じ意味としてまとめるのは問題があると考えられる。また、「抽象的な力」といっても「結束・絆を弱める」と「表現・意味を弱める」は異なる意味の側面を表していると考えられるため、さらに検討が必要であると考えられる²⁾。

(1)

「弱める」

『明鏡国語辞典』第3版：

1. 力や勢いを弱くする。「ガスの火を一」「ワクチンでウイルスの毒素を一」
2. ある作用によって自分のもつ力や働きを弱くする。
「台風がその勢力を一」「体が抵抗力を一」「組合がみずから結束力を一」

以上を踏まえて、本稿では「弱まる」と「弱める」を多義語としてとらえ、形容詞「弱い」との関連性を指摘しながら、2語の意味用法の全貌を明らかにする。

具体的な考察に入る前に、まず、1.1では、多義語の基本的な性質、多義語の位置付けについて先行研究を踏まえて概観する。続いて、1.2では、多義語分析の課題とその解決のために援用する概念について、先行研究に基づき簡略に説明する。

1.1. 多義語の位置付け³⁾

国広 (1982: 97) は、多義語と同音異義語について、次のように定義している。

「多義語 (polysemic word)」とは、同一の音形に、意味的に何らかの関連を持つふたつ以上の意味が結び付いている語を言う。


「同音異義語」とは、同一の音形に、意味的に関連を持たないふたつ以上の意味が存在する場合に生じるふたつ以上の語のことである。

国広 (1982) は「多義語」と「同音異義語」を区別する基準として、意味的な関連の有無を提示しているが、これは決して明確なものではなく、「同音異義と多義の現象は、本質的に連続しているのであり、境界を定めようとするのがそもそも無理なことであると考えべきである」(p. 108) と述べている。また、具体的に観察される2つ以上の意味が、多義であるのか、単一の意義素の文脈の変容であるかの判断基準について、「ある一定の意味を想定し、それが文脈の相違に平行して少しずつ変わって現れると考えられるか否かということである」(p. 109) と述べている。このように、国広 (1982) は同音異義語、多義語、単義語 (単一の意義素の文脈的変容) のそれぞれの境界を明確にすることは困難であり、連続的であるという立場を取っている⁴⁾。

初山 (2016, 2020, 2021) は、多義語に関する膨大な研究を詳細に検討し、多義語の多様性について次のように述べている。

ある語 (音形) に (何らかの観点から) 複数の意味が想定できる場合、その複数の意味がどの程度自立性 (顕著性・慣習性) を有するかは、程度問題 (連続的) であるという見通

しが立てられる。なお、ここでの自立性の程度とは各母語話者における定着の程度および言語共同体における慣習性の程度のことである。また、複数の意味の関連性の程度も連続的であると考えられる。つまり、単義語と同音異義語を両極とし、その中間に、各意味の自立性の程度、複数の意味の関連性の程度が異なる多様な多義語が連続的に存在すると想定される。(靫山 2016: 512)



単義語 単義語寄りの多義語 典型的な多義語 同音異義語寄りの多義語 同音異義語

図1 単義語・多義語・同音異義語の連続性 (靫山 2020: 130, 2021: 29)

以上のように、本稿では多義語の定義、位置付けなどについて、基本的に上記の先行研究と同じ立場に立って考察を進めていく。つまり、「弱まる」と「弱める」の意味分類（複数の意味の認定、意味の自立性・定着度の度合い）は、程度の問題であるという立場をとる。

1.2. 多義語分析の課題

多義語の意味分析をめぐるっては、従来から様々な分析方法が提案されているが、日本語の例を中心に詳細な記述・検討がなされているものとして靫山 (2001, 2002, 2019, 2020, 2021 など) の一連の研究があげられる⁵⁾。それによると、多義語分析の課題として、【1】複数の意味（語義・別義）の認定、【2】プロトタイプの意味（基本的意味）の認定、【3】語義間の関連性の明示、【4】各語義の配列（多義構造図）の明示という4つの課題を設定することができる。

【1】の課題について、靫山 (2001: 32-33) は「多義語は（相互に関連のある）複数の意味を有するのであるから、個々の多義語（と想定されるもの）の意味を記述するにあたり、その語が複数の意味を持つことを示すことが前提となる」と述べている。なお、この課題については多くの研究が積み重ねられ、様々な立場や見解が示されているが、ある語を多義語と認定する手掛かりとして、各語義を取り巻く様々な関連語の違いに注目する方法がある。本稿では、池上 (1975)、国広 (1982)、靫山 (1993, 2021) などを踏まえて、「くびき語法」(zeugma)、「意味分野の違い」という2つの基準を用いて、2語の複数の意味の認定を試みる。

【2】の課題は、認知言語学において広く認められるプロトタイプ理論に基づくものである。つまり、多義語の複数の意味の全体を1つのカテゴリーと考えた場合、そのカテゴリーを構成する個々の要素、すなわち、個々の意味は、すべて同等の重要性を持つのではなく、何らかの意味で優劣があるということを前提とするものである (靫山 2001: 33)。

【3】の課題について、靫山 (2001: 33) は多義語の定義から必然的に導かれるものであるとし、「多義語の複数の意味は相互に何らかの関係が認められるのであるから、個々の多義語の分析にあたり、その関連の実態を明らかにすることが課題となる」と述べている。また、「多

義語の実際の分析を通して、複数の意味の間には一般にどのような種類の関連が認められるかということをはっきりとすることも重要な課題である」とし、「メタファー、シネクドキー、メトニミーという3種の比喩が、複数の意味の関連付けに重要な役割を果たすと考える」と述べている。なお、「弱まる」と「弱める」の語義間の関連性については「メタファー」と「シネクドキー」の2種の比喩が重要な役割を果たすと考えられるため、ここでは舩山・深田(2003: 76-87)、舩山(2010: 35-52, 2020: 97-124)の記述を引用し、次のように示す⁶⁾。

メタファー(隠喩): 2つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩。

「トンボ」: 昆虫の「トンボ」→ グラウンド整備の道具(の一種)

肩の「故障」: 機械の「故障」→ (スポーツ選手の肩の) 故障

シネクドキー(提喩): より一般的な意味をもつ形式を用いて、より特殊な意味を表す、あるいは逆により特殊な意味をもつ形式を用いて、より一般的な意味を表す比喩。なお、より一般的な意味とは、相対的に外延が大きい(指示範囲が広い)ということであり、より特殊な意味とは、外延が小さい(指示範囲が狭い)ということである。

「花」見に行く: 一般的な「花」→ サクラ(の花)

「下駄」箱: 本来の「下駄」→ 履物一般

【4】の課題について、舩山(2020: 132)は「多義語の複数の意味の相互関係を明示することに加えて、個々の意味に共通する意味(スキーマ的意味)を抽出すること、個々の意味を構成要素として含むフレームを明示すること、多義構造全体における個々の意味の位置付けを示すこと等が課題となる」と述べている。なお、本稿で考察する「弱まる」と「弱める」の多義構造の説明については、Langacker(1987, 1990など)が提案する「プロトタイプとスキーマに基づくネットワークモデル」が有効であると考え、以下では2語の多義構造を明らかにする前提として、「スキーマティック・ネットワークモデル」(schematic-network model)について簡単に概観する。

「スキーマティック・ネットワークモデル」

Langacker(1990)によると、「ネットワークモデル」は図2のように示される。

ネットワークにおける個々の節点(node)は、「カテゴリー化関係」(categorizing relationships)によって関連付けられる。なお、「カテゴリー化関係」には、実線の矢印で結ばれる「スキーマ関係」(schematicity)と破線の矢印で結ばれる「拡張関係」(extension)という2つの基本的なタイプが関係している⁷⁾。

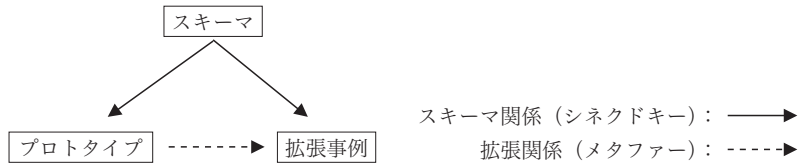


図2 Langacker (1990: 271, 図4 (a))

「スキーマ関係」、つまり $[A] \longrightarrow [B]$ は、 $[A]$ が $[B]$ に対してスキーマ的であり、 $[B]$ は $[A]$ を詳細化したもの (elaboration) あるいは具体化したもの (instantiation) であることを表す。言い換えれば、 $[B]$ は $[A]$ と両立する (矛盾しない) が、 $[B]$ は $[A]$ より詳細であることになる (従って、この関係は意味の「特殊化」(specialization) あるいは、逆に言う「抽象化」(abstraction) の関係となる)。それに対して、拡張関係、つまり $[A] \dashrightarrow [B]$ では、若干の衝突が生じる。すなわち、拡張された意味 $[B]$ に達するには、基本的意味 $[A]$ のある意味特徴が保留あるいは変更されなければならない。つまり、拡張関係は意味における何らかの不一致を含むことになる⁸⁾。

意味拡張の例として、Langacker (2008) から mail という語を取り上げる⁹⁾。名詞 mail には、少なくとも以下の意味 (1) と意味 (2) を認めることができる。

- 意味 (1) : 郵便システムによって配達される、物理的な意味での伝言 ([MAIL] : 普通の郵便)
- 意味 (2) : コンピュータによって、電子工学的に配信される伝言 ([EMAIL] : 電子メール)

この2つの意味のうち、意味 (1) は mail のプロトタイプの意味として用いられると考えられる。また、意味 (2) は、意味 (1) から拡張関係 (メタファー) によって成り立っていると考えられる。つまり、両者の間からは、〈伝言は主に言語によって表現され、書いて送ったものを相手が受け取って読むという一連の流れがあり、一定のネットワークを通じて配達される〉という共通の意味特徴を抽出することができる。つまり、スキーマは以下の意味 (3) のように示すことができる。なお、意味 (1) と意味 (2) の間には、それぞれ〈伝言が紙に書かれ、物理的に配達される〉、〈伝言が (紙に書かれる代わりに) コンピュータの画面に現れる〉という点において不一致が見られる。

- 意味 (3) (スキーマ (的意味)) : 一定のネットワークを通じて配達される伝言 ([MAIL'])

本稿では、以上の「スキーマティック・ネットワークモデル」を援用し、「弱まる」と「弱める」の多義構造を明らかにする。

2. 「弱まる」と「弱める」の意味分析

本節では、以上の多義語分析の基本的な考え方と方法を踏まえて、「弱まる」と「弱める」の意味を分析し、次のように下位分類を行った¹⁰⁾。

表1 「弱まる」と「弱める」の意味分類

意味分類		～が弱まる	～を弱める
物(質)の力の衰退	物(質)	火力、放射能、電波、(水の)流れ、(弾丸の)速度	ガスの火、毒素、火力、酸性、水流
	気象現象	風雨、雨脚、寒さ、日差し、高気圧、寒気	光、風、低気圧、雨脚
	生理現象	痛み、陣痛、症状	痛み、症状
体力の衰退		筋肉、体力、足腰、視力、粘膜	体力、足腰、筋肉、体質、免疫力
事柄の力の衰退	働きかけ	攻撃、抵抗、影響、反撃、支配	支配、抵抗、圧力、働きかけ
	地位・基盤	権力、求心力、体制、基盤	権利、権限、地位
	性向	傾向、成長、需要、伸び、機能、効果、活動	傾向、効果、可能性、活動
	関係	絆、つながり、結びつき、関係、まとまり	関係、団結、結合、つながり、結束
	心情	意識、心、信仰、志向、意欲、気持ち	心、意識、意欲、動機、印象、信仰、土気、姿勢
	言動	意味、批判	意味、表現、主張、批判

まず、2語の意味は【物(質)の力の衰退】【体力の衰退】という「具体物に関する用法」と【事柄の力の衰退】という「抽象物に関する用法」のあわせて3つに分けられる。なお、【物(質)の力の衰退】については「物(質)」「気象現象」「生理現象」という3種類を、【事柄の力の衰退】については「働きかけ」「地位・基盤」「性向」「関係」「心情」「言動」という6種類を、それぞれ下位類として立てられる。

以上を踏まえて、表2のように、相当程度の自立性を有する意味として3つの語義(意味)を認定し、また自立性が相対的に劣っている意味として9つの語義を認定する。以下では、「くびき語法」と「意味分野の違い」という2つの基準に基づき、意味認定の根拠を示す。

まず、語義3は、語義1・語義2と、「具体物」対「抽象物」というように、属する意味分野が明らかに異なっていることから、確立した語義として認められる。次に、表中に示すように語義1と語義2はそれぞれ「くびき語法」が成立することから、確立した語義として認められると考えられる。ただし、このくびき語法に関しては、語義1と語義3における下位類に関しても適応できる場合があることから、本稿ではこれらの下位類についても語義として立てる。しかし、母語話者が表中にあるような共起語を含む文を理解する際に、例えば、語義

表2 「弱まる」と「弱める」の複数の意味の認定¹¹⁾

語 義		語義の認定基準	
語義 1 【物(質)の力の衰退】	1-1物(質)	意味分野：具体物	くびき語法：？ <u>火力</u> (語義1-1) と <u>高気圧</u> (語義1-2) が弱まる (を弱める) くびき語法：？ <u>放射能</u> (語義1-1) と <u>陣痛</u> (語義1-3) が弱まる (を弱める)
	1-2気象現象		
	1-3生理現象		
語義 2 【体力の衰退】			くびき語法：* <u>水流</u> (語義1) と <u>筋肉</u> (語義2) が弱まる (を弱める)
語義 3 【事柄の力の衰退】	3-1働きかけ	意味分野：抽象物	くびき語法：？ <u>攻撃</u> (語義3-1) と <u>地位</u> (語義3-2) が弱まる (を弱める) くびき語法：？ <u>圧力</u> (語義3-1) と <u>需要</u> (語義3-3) が弱まる (を弱める) くびき語法：？ <u>成長</u> (語義3-3) と <u>絆</u> (語義3-4) が弱まる (を弱める) くびき語法：？ <u>効果</u> (語義3-3) と <u>信仰</u> (語義3-5) が弱まる (を弱める) くびき語法：？ <u>意欲</u> (語義3-5) と <u>表現</u> (語義3-6) が弱まる (を弱める)
	3-2地位・基盤		
	3-3性向		
	3-4関係		
	3-5心情		
	3-6言動		

3で言えば【関係】や【心情】のような下位類より、上位概念となる何らかの【事柄(の力の衰退)】のほうに注目する傾向が強いことから、相対的に自立性の低いものとして位置付ける。

次に、「弱まる」と「弱める」のプロトタイプの意味について検討する。プロトタイプの意味の認定の問題をめぐることは、様々な観点から考察がなされているが、一般的にプロトタイプの意味は、拡張した意味を理解するための前提となり、具体性・身体性が高い、母語話者の頭の中で(文脈なしで)認知・想起されやすい、他の語義より早い段階で習得される、使用頻度が高い、用法上の制約を受けにくいといった特徴を持つ(瀬戸 2007, 初山 2021など)。本稿では、語義1を2語のプロトタイプの意味として考える。すでに見たように、語義1は「物(質)の力の衰退」という具体性が高く、拡張した意味を理解するための前提となる語義として位置付けられる。具体性というのは、対象に対する観察可能性の度合い、イメージの具体性といったものであり、これは比喩的転義・拡張において見られる単方向性(unidirectionality)と呼ばれる性質につながるものでもあり、従って、「具体物」に関する用法から「抽象物」に関する用法への拡張は妥当であると考えられる¹²⁾。以上のことから、語義1を「弱まる」と「弱める」のプロトタイプの意味(意味拡張の起点)として認定する¹³⁾。

2.1. 「弱まる」と「弱める」の語義

以下では、以上の分類結果を踏まえて、様々なレベルの意味の自立性(定着度)を有する「弱まる」と「弱める」について、スキーマの意味を含めて、14個の意味を認定し、考察を行う。

2.1.1. 語義1【m1：物（質）の力の衰退】（語義1-1～語義1-3のスキーマ）

「弱まる」：〈物（質）が持つ〉〈力・勢いの程度が〉〈小さくなる〉

「弱める」：〈主体が〉〈物（質）が持つ〉〈力・勢いの程度を〉〈小さくする〉

語義1は意味拡張の起点となるプロトタイプの意味であり、以上のように記述できる。〈力・勢いの程度〉という意味特徴は、（あくまで程度の問題であるが）例(3)、(4)のように、エネルギーそのもののスケールの側面が注目される場合もあれば、例(5)、(6)のように、速度の側面（勢い）が注目される場合もある。なお、語義1は物理的エネルギーを持つ具体物に関して用いられる意味であり、下位類として火力、酸性、（弾丸の）速度などの【物（質）】に関わるもの、風雨、低気圧、寒気などの【気象現象】に関わるもの、物質などの働きによって引き起こされる痛み、陣痛、症状などの【生理現象】に関わるものの3種類を立てることができる。以下、主な例をあげる。

語義1-1【物（質）】

- (3) 炭がまだ黒っぽいうちに崩してしまうと火力が弱まり、そのまま消えてしまうことがあるので注意しましょう。

(<https://sports.yahoo.co.jp/column/detail/201908220012-spnavid0>)

- (4) チル酸の酸性を弱めた「アセチルサリチル酸」を合成し、商標「アスピリン」として飲みやすい錠剤を発売しました。

(<https://www.toyota-kai.or.jp/hospital/public/pdf/no152.pdf>)

- (5) この時、弾丸はガラスを貫通する度に明らかに速度が弱まっているのが分かります。

(<https://gigazine.net/news/20220726-bullet-glass/>)

- (6) ポピーパイプとは、ポピー（雛罌粟）という花の形をしたガラスパイプの事で、外部フィルターの水流を弱めたりする場合に使います。

(<https://aquakaido.com/poppy-pipe/>)

語義1-2【気象現象】

- (7) 午後になると上空の寒気が弱まって雨雲は少なくなるとみていますが、完全に解消することはなく引き続き、にわか雨に注意が必要です。

(<https://weathernews.jp/s/topics/202111/050085/>)

- (8) 気象制御の具体的な目的は、少雨の地域に雨を降らせたり（人工降雨を参照）、熱帯低気圧を弱めたりその進路を変えたりすることで、大雨や高温や低温、突風などの被害を与える又は与える可能性のある気象現象を軽減することにある。

(<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B0%97%E8%B1%A1%E5%88%B6%E5%BE%A1>)

語義1-3【生理現象】

(9) 食事をとっていないと、エネルギー不足で陣痛が弱まってしまうことがあります。

(<https://sapporo-mirai.jp/column/shussan/2712/>)

(10) 薬には副作用もありますし、何よりも一時的に痛みを弱めているだけなので、背中の痛みの根本的な解決にはなっていません。(<https://koishikawa-bw.jp/guide/senaka>)

2.2.2. 語義2【m2：体力の衰退】

「弱まる」：〈身体部位が持つ〉〈力・作用の程度が〉〈小さくなる〉

「弱める」：〈主体が〉〈身体部位が持つ〉〈力・作用の程度を〉〈小さくする〉

語義2は、「物理的なエネルギーの程度が小さくなる（を小さくする）」という点で語義1と共通しているが、主に人間（の身体部位）が持つ体力に関して用いられるという点で語義1とは異なる。以下、主な例をあげる。

(11) やせすぎるとからだを支える骨や筋肉が弱まります。

(https://www.tokyo-eiyo.or.jp/user_data/magazine/201901)

(12) 冬ごもりは、足腰を弱め、筋肉が衰え、若さを徐々に失せさせていきます。

(<http://www.hotweb.or.jp/yoshidao/idea/idea361.html>)

2.2.3. 語義3【m3：事柄の力の衰退】（語義3-1～語義3-6のスキーマ）

「弱まる」：〈事柄が持つ〉〈力・勢いの程度が〉〈小さくなる〉

「弱める」：〈主体が〉〈事柄が持つ〉〈力・勢いの程度を〉〈小さくする〉

語義3は語義1、語義2とは異なり、抽象物（事柄）に関して用いられ、「抽象的なエネルギーの程度が小さくなる（を小さくする）」ということを表す。なお、以下に示すように、語義3はさらに6つに下位分類される。

語義3-1【働きかけ】

(13) しかし、さすがの真田軍も寡兵となり、目標である家康の首を挙げることはできませんでした。真田軍の攻撃が弱まり、家康の反撃が開始しました。

(<https://www.sanadahimo.com/yukimura/yukimura4.html>)

(14) 汚職は法の支配を弱め、市場を歪め、他人の権利と資源を奪います。

(<https://www.guinnessworldrecords.jp/about-us/business-partner-code-of-conduct/business-integrity>)

語義3-2【地位・基盤】

- (15) 幕末期は江戸幕府の権力が弱まり、少しずつ鎖国の実行力も薄れてきました。
(https://www.pancia1916.com/contents/the_history.html)
- (16) 集团的労使関係について、現行法制上の権利義務関係を修正し、労働組合の地位を弱める可能性のある法改正には賛成できない。
(https://www.jtuc-rengo.or.jp/activity/roudou/data/minpo_kaisei_ronten_iken_20110801.pdf?38)

語義3-3【性向】

- (17) 輸出量については、世界的な輸入需要が弱まると見込まれ、2826万トン（同1.7%減）とわずかな減少が見込まれている。(<https://www.alic.go.jp/content/001221005.pdf>)
- (18) 国際競争が賃金主導型の可能性を弱めるという Blecker 等の主張は、利潤主導にも当てはまる。(https://www.jstage.jst.go.jp/article/peq/46/4/46_KJ00009409343/_pdf)

語義3-4【関係】

- (19) 家族や地域の絆が弱まりつつあるなかで、高齢者や障がい者などを見守る新しい仕組みが求められています。
(https://www.city.inabe.mie.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/002/171/2744a_0.pdf)
- (20) 日本に対する一方的な要求は同盟の結束を弱め双方にマイナスだという声が、アメリカ国内からも出ています。(<https://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/300/418793.html>)

語義3-5【心情】

- (21) 核家族化の進展や地域コミュニティの希薄化とともに、地域ぐるみで子どもを育む意識が弱まりつつあることから、世代間の子育て情報の共有や家庭と地域との連携を促進することで「親力」や「地域の教育力」の向上を図ってきました。
(<https://www.city.shiraoka.lg.jp/material/files/group/2/R3sougoukyouikaigi2.pdf>)
- (22) 報酬の多くは賃金＝お金ですが、このお金が仕事本来の純粋な動機を弱めてしまう。
(<https://www.smcjapan.co.jp/2018/06/01/staff201806/>)

語義3-6【言動】

- (23) この「通例である」との記述については意味が弱まらない程度に正確な表現にした方がいいと思う。(<https://www.npa.go.jp/hanzaihigai/suisin/kihon/gizi8.html>)
- (24) ウクライナのゼレンスキー大統領は17日、ポーランド東部に着弾したロシア製ミサイ

ルの帰属について「きょう何かを特定するのは不可能だ」と述べ、ウクライナの迎撃ミサイルではないとする従来の主張を弱めた。

(<https://www.sankei.com/article/20221118-7KCEZOQ4OFNEXMNBHHHBJGVCXU/>)

2.3. 「弱まる」と「弱める」の多義構造

以上の分析に基づき、「弱まる」と「弱める」の意味拡張の動機付けについて述べる。まず、語義2は、意味拡張の起点である語義1と類似性に基づくメタファーによって関連付けられる。というのは、語義2と語義1は、「物(質)」と「人間(の身体部位)」という明らかに異なる対象が問題になっているが、「物理的なエネルギーの程度が小さくなる(を小さくする)」という点では共通している。このことから、両者の間からは、次のようなスキーマ的意味1を抽出することができる。

スキーマ的意味1 (s1: 語義1と語義2のスキーマ)

「弱まる」: 〈ある対象(具体物)が持つ〉〈物理的なエネルギーの程度が〉〈小さくなる〉

「弱める」: 〈主体が〉〈ある対象(具体物)が持つ〉〈物理的なエネルギーの程度を〉〈小さくする〉

次に、語義3は、「具体物から抽象物への拡張」という動機づけに支えられ、語義1から類似性に基づくメタファーによって、意味拡張していると考えられる。つまり、両者の間からは、次のようなスキーマ的意味2を抽出することができる。

スキーマ的意味2 (s2: 語義1と語義3スキーマ):

「弱まる」: 〈ある対象が持つ〉〈エネルギーの程度が〉〈小さくなる〉

「弱める」: 〈主体が〉〈ある対象が持つ〉〈エネルギーの程度を〉〈小さくする〉

以上の分析結果に基づく、「弱まる」と「弱める」の多義構造は、図3のように示すことができる。

以下、図3の「弱まる」と「弱める」多義構造の表記について、補足説明をする。

- 1) 「弱まる」と「弱める」は2つのスキーマ的意味を含めて、14個の意味を持つ。
- 2) 2語のプロトタイプの意味(意味拡張の起点)は、m1(太字)となる。
- 3) m1とm2はメタファーの関係にあり、スキーマ的意味としてs1を抽出することができる。また、m1とm3もメタファーの関係にあり、スキーマ的意味としてs2を抽出することができる。なお、s2はs1より高次の(抽象的な)スキーマとして位置付けられる。

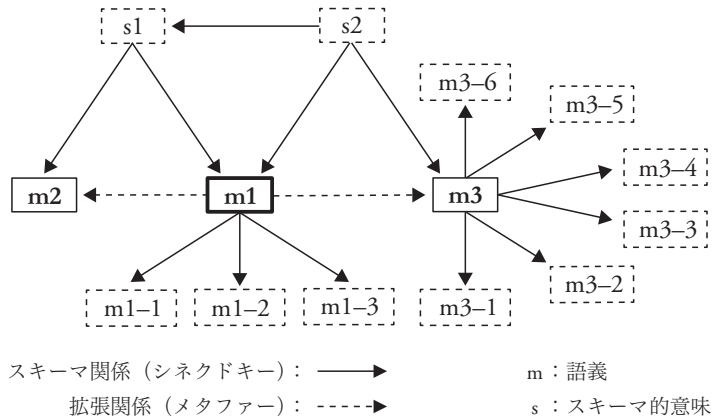


図3 「弱まる」と「弱める」の多義構造

4) 各語義の自立性 (定着度) について

- a. 太線の実線の四角 (m1) : 最も定着度 (自立性) が高い。
- b. 実線の四角 (m2 と m3) : 相当程度の定着度 (自立性) を有する。
- c. 点線の四角 (上記以外) : 相対的に定着度 (自立性) が低い。
 - ・ m1 から m2、m3 へメタファー拡張する際に抽出された s1 と s2 は自立性 (定着度) が低い。
 - ・ m1 と m3 の下位類として設定した各語義は、(m1 と m3 に比べて) 定着の程度、顕著性の度合いが低い。

3. 「弱い」との対応関係

本節では、形容詞「弱い」との意味の対応関係について検討する¹⁴⁾。

まず、表3から、「弱まる」と「弱める」の語義1から語義3のすべてにおいて、形容詞「弱い」と対応関係にあることが分かる。ただし、語義3-3【性向】については、「?需要が弱い」「?活動が弱い」のように、「弱い」とは共起しにくい語もある。これは、需要や活動のような語は時間の流れに沿って変化していく側面に焦点が置かれるため、形容詞の一般的な特徴である「(時間の側面を排除した) 非時間的關係」を問題にすることが難しいと考えられるからである¹⁵⁾。

一方、「弱い」には「将棋・数学が弱い/機械に弱い」のように【不得手な技量・能力】を表す意味と、「熱・水害・摩擦に弱い」のように【物事に対する軟弱な対抗力(耐久力)】を表す意味が認められるが、「弱まる」と「弱める」にはこのような意味用法を持たない。これに関連して、Levin and Rappaport (1995: 96) は、一般的に「一時的な特性」(stage-level property)

表3 「弱まる／弱める」と「弱い」の対応関係

意味分類		弱まる	弱める	弱い
語義1 【物(質)の力の衰退】	1-1物(質)	火力、放射能、電波、 (弾丸の)速度	毒素、火力、酸性、 水流	○
	1-2気象現象	風雨、寒さ、日差し、 高気圧、寒気	光、風、低気圧	○
	1-3生理現象	陣痛、症状	痛み、症状	○
語義2 【体力の衰退】		筋肉、体力、視力、 粘膜	体力、足腰、筋肉、 体質	○
語義3 【事柄の力の衰退】	3-1働きかけ	攻撃、抵抗、影響、 支配、圧力	支配、抵抗、圧力	○
	3-2地位・基盤	権力、求心力、体制、 基盤	権利、権限、地位	○
	3-3性向	傾向、成長、需要、 機能、効果、活動	傾向、効果、活動、 可能性	△
	3-4関係	絆、つながり、関係、 結束	関係、団結、結合、 結束	○
	3-5心情	意識、心、信仰、志 向、意欲、気持ち	心、意識、意欲、印 象、信仰、士気	○
	3-6言動	意味、批判	意味、表現、主張、 批判	○
【不得手な技量・能力】		×	×	<u>将棋・数学が弱い</u> ／ <u>機械に弱い</u>
【物事に対する軟弱な 対抗力(耐久力)】	物理的・肉体的	×	×	<u>熱・水害・摩擦に</u> 弱い
	抽象的・精神的	×	×	<u>誘惑・女・ムード</u> に弱い

を示す形容詞は動詞化するが、時間と共に変化しない「恒常的な特性」(individual-level property)を示すものは動詞化されないと指摘している。このことは、日本語の動詞「弱い」にも当てはめて考えることができる。つまり、形容詞「弱い」が持つ【不得手な技量・能力】【物事に対する軟弱な対抗力(耐久力)】という意味は、「恒常的な特性」として位置付けられるため、派生動詞「弱まる」と「弱める」には表われないと考えられる¹⁶⁾。

4. おわりに

以上、本稿では形容詞派生動詞「弱まる」と「弱める」が持つ複数の意味を記述した上で、Langacker (1987など) が提案している「スキーマティック・ネットワークモデル」を援用し、2語の多義構造を明らかにした。また、「一時的な特性」と「恒常的な特性」を参考にして、形容詞「弱い」との対応関係についても詳細に検討した。

今後の課題として、「弱くなる」、「弱くする」などの関連語との比較分析を通じて、形容詞派生動詞の意味記述をさらに精緻化する必要がある。また、形容詞派生動詞の全体像を明らかにするためには自他交替に関する検討も欠かせない。いずれも今後の課題としたい。

附記：本研究は、JSPS 科研費 JP22K00586の助成を受けたものである。

注

- 1) 詳細は後述するが、単義と多義の区別はあくまで程度の問題であるため、その境界を明確にすることは困難である。
- 2) 日本語の他動詞構文には、「台風がその勢力を弱める」「体が抵抗力を弱める」「そのような興味や関心が探求意欲を高める」のように、(人などの動作主ではなく) 物事が主語の位置に来るケースがあり、杉岡(2002)はこのようなタイプを「自発変化他動詞構文」と呼んでいる。つまり、『明鏡国語辞典』であげている意味2は、他動詞構文一般に見られるものであると考えられる。なお、本稿ではこのようなタイプを含めて、「主体」という用語に統一して記述する。
- 3) 1.1と1.2は、李(2020, 2023a, b)に基づくものである。
- 4) Tuggy(1993)にも同様の趣旨の主張が見られ、ambiguity(両義性)、polysemy(多義性)、vagueness(漠然性)の連続性を指摘している。なお、この3つはそれぞれ同音異義語、多義語、単義語に対応すると考えられている。
- 5) 大月(1993)は、多義語の意味分析において「一つの語にいくつの意味を認めるか」「基本的意味(始原的意味)の定義の問題」「始原的意味からの連想による派生」という手順を提案し、英語の色彩表現を取り上げて分析している。また、瀬戸(2007)は、多義語を体系的に記述するために「中心義の設定」「各意義の認定」「各意義の関連」「各意義の配列」という4つの問題を設定し、主に英語の例を取り上げて検討している。
- 6) 3種の比喻の定義・性質・種類をめぐっては諸説あるが、本稿では基本的に初山の定義に従って分析を行う。
- 7) スキーマとは、すべてのカテゴリーの成員に共通する性質を抽出した意味とされ、いくつもの具体例を通じて、一般化、抽象化される。
- 8) 初山(2001, 2021)は、スキーマ関係は比喻の一種であるシネクドキーに相当し、拡張関係はメタファーに相当することを明らかにしている。
- 9) 鷲見(2013:35-37)に詳細に解説されている。
- 10) 本稿における用例は、NINJAL-LWP for TWC(NLT)及びウェブ検索エンジン(Yahoo)から採集したものである。
- 11) 本文中の引用例の容認度に用いた「*」はその表現が非文であることを表す。また、「?」はその表現が非文ではないが、容認度が低いことを表す。
- 12) 単方向性とは、比喻変化(とりわけ隠喩)において一定の方向性(具体性の高いソースから抽象性の高い

- ターゲットへの拡張)が見られることを指す(菅井2003: 152)。
- 13) NLT を使って2語の共起語(5位まで)を調べたところ、「弱まる」は「1位(語義2: 248例)→2位(語義3: 246例)→3位(語義1: 92例)→4位(語義1: 80例)→5位(語義2: 72例)」であり、「弱める」は「1位(語義3: 292例)→2位(語義1: 122例)→3位(語義2: 119例)→4位(語義1: 111例)→5位(語義1: 81例)」であった。このように「使用頻度」の観点からすると、(とりわけ「弱まる」については)語義1をプロトタイプの意味として認定することは問題があると考えられるため、多義語の複数の意味における中心性(松本2010, 木下2019)の観点から、さらに検討が必要であると考えられる。
- 14) 形容詞の「名詞修飾用法」「叙述用法」などの形式的な違いに関する検討は今後の課題としたい。
- 15) Langacker (2008: 100) は、認知文法における品詞の規定に関する記述の中で、形容詞は非プロセス的(非時間的)な関係(non-processual relation or atemporal)を焦点化(プロファイル)すると指摘している。また、北原(2010: 17)は、「形容詞は物事の性質、状態や感情・情意を表すが、これらは時間とは関係のない、いわば超時間的な概念である。」と述べている。
- 16) 李(2023b)を参照。

参考文献

- 池上嘉彦(1975)『意味論』, 大修館書店。
- 李澤熊(2020)『日本語の意味研究の新たな扉を開く—意味分析の方法と実際—』, 開拓社。
- 李澤熊(2023a)『現代日本語における意図性副詞の意味研究—認知意味論の観点から—』, ひつじ書房。
- 李澤熊(2023b)「丸まる」と丸める」の多義構造—認知言語学の観点から—」『名古屋大学人文学研究論集』第6号, pp. 311-330, 名古屋大学人文学研究科。
- 大月実(1993)「多義語の意味分析の方法について—英語の色彩表現を例に—」『大東文化大学紀要 人文科学』第31号, pp. 367-377, 大東文化大学。
- 木下りか(2019)「多義動詞の意味拡張の起点と直観的プロトタイプ」『日本認知言語学会論文集』第19巻, pp. 519-524, 日本認知言語学会。
- 北原保雄(2010)『日本語の形容詞』, 大修館書店。
- 北原保雄(2011)『明鏡国語辞典』第3版, 大修館書店。
- 国広哲弥(1982)『意味論の方法』, 大修館書店。
- 菅井三実(2003)「第4章 概念形成と比喩的思考」辻幸夫(編)『認知言語学への招待』, pp. 127-182, 大修館書店。
- 杉岡洋子(2002)「形容詞から派生する動詞の自他交替をめぐる」『文法理論: レキシコンと統語』, pp. 91-116, 東京大学出版会。
- 鷲見幸美(2013)「第2章 カテゴリー化とプロトタイプ」森雄一・高橋英光(編著)『認知言語学 基礎から最前線へ』, pp. 27-50, くろしお出版。
- 瀬戸賢一(2007)「メタファーと多義語の記述」楠見孝(編)『メタファー研究の最前線』, pp. 31-61, ひつじ書房。
- 日本国語大辞典第2版編集委員会(2003)『日本国語大辞典』第2版, 小学館。
- 松村明(監修)(2012)『大辞泉』第2版, 小学館。
- 松本曜(2010)「多義性とカテゴリー構造」澤田治美(編)『語・文と文法カテゴリーの意味』(ひつじ意味論講座1), pp. 23-43, ひつじ書房。
- 初山洋介(1993)「多義語分析の方法—多義的別義の認定をめぐる—」『名古屋大学日本語・日本文化論集』第1号, pp. 35-57, 名古屋大学留学生センター。
- 初山洋介(2001)「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」『認知言語学論考』No. 1, pp. 29-58, ひつじ書房。
- 初山洋介(2002)『認知意味論のしくみ』(シリーズ・日本語のしくみを探る), 研究社。

- 舩山洋介 (2010) 『認知言語学入門』, 研究社.
 舩山洋介 (2016) 「多義語の多様性: 典型的な多義語と単義語寄りの多義語」『日本認知言語学会論文集』第16巻, pp. 512-517, 日本認知言語学会.
 舩山洋介 (2019) 「多義語分析の課題と方法」ブラシャント・パルデン・舩山洋介・砂川有里子・今井新悟・今村泰也(編)『多義動詞分析の新展開と日本語教育への応用』, pp. 32-50, 開拓社.
 舩山洋介 (2020) 『実例で学ぶ 認知意味論』, 研究社.
 舩山洋介 (2021) 『[例解] 日本語の多義語研究—認知言語学の観点から』, 大修館書店.
 舩山洋介・深田智 (2003) 「第3章 意味の拡張」松本曜(編)『認知意味論』(シリーズ認知言語学入門第3巻), pp. 73-134, 大修館書店.
 Langacker, R. W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar* (Vol. 1). *Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
 Langacker, R. W. (1990) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
 Langacker, R. W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press. (山梨正明監訳 (2011) 『認知文法論序説』, 研究社.)
 Levin, B. and M. Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. MIT Press.
 Tuggy, D. (1993) "Ambiguity, Polysemy, and Vagueness." *Cognitive linguistics* 4(3): pp. 273-290.

キーワード: 形容詞派生動詞、認知言語学、多義語、多義構造、スキーマティック・ネットワークモデル

Abstract

A Semantic Analysis of *yowamaru* and *yowameru*:
From the Viewpoint of Cognitive Linguistics

LEE Tackung

This text described the multiple meanings of deadjectival Verbs *yowamaru* and *yowameru* in addition to discussing the relation between these multiple meanings (the polysemic structure). Resultantly, it was acknowledged that there were three equivocal different meanings acknowledged for *yowamaru* and *yowameru*.

Furthermore, the relation between the different meanings was considered by looking at the two types of symbolic language, metaphor and synecdoche, and it was thus possible to clarify the relation among the different meanings.

Finally, since these two verbs are a corresponding transitive/intransitive verb pair, the corresponding relationship between the different meanings of the verbs was also examined. The results of this examination clarified that the meanings of these words corresponded to each other.

Keywords: deadjectival verb, cognitive linguistics, polysemic word, polysemic structure, schematic-network model